

# ヒュームの宗教観の基底にあるもの

鈴木 孝

A problem underlying Hume's theory of religion

Takashi SUZUKI

When we make a philosophical reflection on religion, we cannot help being concerned with determining whether we can acquire any knowledge of religion, or whether it has an objective rationale. In thinking about the foundations of religion Hume wanted to know whether any problem of Divine Being can be proved to be objectively justified.

The problem I wish to explore here is to find out what underlies Hume's study in "Dialogues Concerning Natural Religion." For Hume, to speak of religion was to speak of something beyond the reach of human faculties. According to his analysis of religion, I noticed that imagination played an important role in his "Dialogues" and "Treatise." Imagination works under currently whether positively or negatively.

I think it is the imagination that is a key to study Hume's intentions in the whole field of his religion and philosophy.

## (1)

ヒュームは周知のごとくニュートンから継承された合理的悟性の使用によって人間本性を解明しようとしたのであり、ニュートンの実験的論考による思考を理性と感情のもつれあった人間本性にも適用していかなしたのである。たとえばヒュームはニュートンをかぎりなく賞賛してヒューム自身の著であるイギリス史のなかでつぎのようにいう。「この国は人類の装飾や知識のために 史上最大の最も偉大にして最もまれな天才を誇ってもよい。……略……ニュートンはいくつかの自然の秘密のヴェールを取り去り同時に機械論的哲学 *mecanical philosophy* の不完全さを指摘した。彼は自然の窮極の神秘性はその不明瞭さにあるとした<sup>(1)</sup>」と。ニュートンの「自然の秘密」は、ヒュームにおいては「人間の秘密」におきかえられたのである。ヒュームの態度はさらに方向を定め「一体明らかにすべての学は多かれ少なかれ人性に関係をもち、外見はいかにはなれている学問があるにせよ、なんらかの経路をとおって人性に帰ってくるのである<sup>(2)</sup>」ということになる。

主著 *Treatise* では悟性、情緒、道徳が解明され *Dialogues concerning Natural Religion* のなかでは「神性」についての論考が行なわれることになる。そこで *Dialogues* をみると冒頭にこうある。「哲学を学ぶものはまず論理学、つぎに倫理学、つぎに自然学、すべての最後に神の本性のすべてを学ぶべきである。その難解さはそれを学ぶものに最も熟達した判断を要求し、他のすべての学問で豊かにされた精神以外にはこの神についての問題はまかせられることができない。<sup>(3)</sup>」と。私はヒュームの宗教論をみることによって経験論における神性観の一典型をそこにみて、私自身の形而上学への態度に一つの示唆を与えてくれることを念じつつこの小論をすすめる次第である。

## (2)

ヒュームが“Dialogues”を書いたのは晩年のことであり、その出版は死後になってしまった。そのラディカルな論述は社会への影響の大なることまちがいないとしてアダム・スミスやストラトンなどは出版のスポンサーになるのを拒否してしまった。そんな書物である。ホワイトヘッドはこう約言している。「その隔たり (gulf すなわち神と世界の gulf) の最悪点は向こう側におこっていることを知るのは非常にむずかしいということ。これは伝統神学の宿命であった。神の存在証明はわれわれの現在の世界からのみ集められるというのは神秘主義の嘘言にすぎない。……略……この全問題がヒュームによってその有名な Dialogues のなかで論議されている<sup>(4)</sup>」。実際にヒュームは意気込んで晩年に「神性」と対決したのであり、18世紀前葉の理神論論争の終止符たらしめたためでもあろうか。神性についての真理をとりあつかったとき「かの神的存在者の本性、その属性、天慮、摂理の計画などについていかなる不明確な問題が発生するだろうか。これらの問題はつねに人間の論争の種となってきている。しかしこれらは非常に興味深いので最もすばらしい探求の結果といえども疑わしい不明瞭な矛盾にみちたものでしかないのである。私達はこれらの問題について止むことのない探求をやめるわけにはいかないのだ<sup>(5)</sup>」と。“Dialogues”は3人の立場を異にする人物の対話から構成されている。伝統的神学的立場の代弁者としてのデメア、徹頭徹尾懐疑的否定の立場のフィロ、理神論的宗教家とみられるクレアンサスの3人である。そこでの対話の重点はだれか、ヒュームの代弁者はだれとするのが至当かという問題がうかびあがってくる。一見フィロをヒュームとみるのは無理のないことである。一方、経験からの推察をおして宗教を肯定するクレアンサスをヒュームとする意見もある。たとえば B. M. Laing のように「クレアンサスは独断論と懐疑論を調停しようと試みているヒュームなのだ」とすることもできよう<sup>(6)</sup>。フィロの主張のなかにヒュームらしい論考がくりひろげられるのは事実である。すなわち「まさに、私達の誤りや虚偽を目の前に置くことにしよう。すなわちあらゆる体系の第一原理にともなう解決のできない困難についてである。事物や原因結果、拡がり、時間、運動、結局あらゆる事柄についてなんらかの確実性とか明証性をたしかに装いうる個別科学の対象などについてである。……略……これらのよく知られた事柄が実は説明もされず、非常に不愉快な矛盾した事実を含んでいるとき、私達はいかなる確信をもって世界の起源を決定したり、永遠から永遠にわたってその歴史を決定したりすることができるだろうか」とフィロの言葉は宗教上の一切の非合理的ものを否定しているのである<sup>(7)</sup>。さて、理神論的宗教家のクレアンサスをみてみよう。彼はフィロの主張を非難している。クレアンサスはフィロの合理的思考への確信に明らかに不安を示す。クレアンサスによると私達の日常の感覚などたいしてあてにならないではないか。コペルニクスの体系をみよ、「私達の自然の概念や現象や感覚とまさに反対ではないか。だのに僧侶や宗教裁判官は今日、反対意見をひきさげざるをえないではないか。そこでフィロ君、君のようにたいそう自由な才能のある広い知識の持主は宗教的仮定に対して、つねに変わることのない躊躇の念を持つてあろうか。その宗教的仮定とは最も簡単で最も明白な論議であってなにかわざとらしい妨害に会うのでなければ容易に人間の心にくい入り認容されるものではないか」というのである<sup>(8)</sup>。さて以上はフィロの側よりみれば明らかに素朴な反対意見とみられねばなるまい。二人の立場を端的に示すものとしてこの引用をおこなったのであるが、明らかにクレアンサスは不徹底であり、結局 Treatise にみられるような論証の態度と精神はフィロによって弁ぜられているとみるべきであろう。

(3)

前章で“Dialogues”の内容と方向を概述したつもりであるが、さらに“Dialogues”をもとにしながらくわしく神の問題をひもとくことにしよう。まず“Dialogues”のなかに登場する3人の人物の説くところを再考してみよう。

伝統的宗教家とみなされるデメヤはいう。神は人間からは深い雲によってかくされている。それは無限に完全な存在者であって、神の存在は疑うことすら許されない絶対的真理であると。神は非物質的でしかも物質の働きを包括し、精神的ならずして精神的なるものの働きを自己に含んでいるものである。人間が神の本性や神慮や属性を窺いしめるということはそれ自身冒瀆であり暴挙である。以上がアプリオリに神を肯定するデメヤの主張である<sup>(9)</sup>。

クレアンサスは経験からの推察をとおして宗教を肯定する立場にたち、いわば批判的宗教家である。彼によれば世界は機械的な秩序を持っていてそれは精巧微妙な機械じかけであるとされる。その機械はだんだんと小さい機械から機械にと続きそれらは見事に調整されていて驚嘆のほかはない。この場合、一つ一つの機械を見るとその目的にむかって手段は調整されていて、人間の思索と叡知と知性から行なう計画により生みだされたものに非常に似ている。私は同じ原因から同じ結果がという「類似の規則」the rule of analogyによって、心に似ていてより強力なあるものによって世界は創られたと推察せざるをえない。以上がクレアンサスの説明である。このようにアポステリオリな論証により人間精神および知性に類似せる神性の存在を信じて疑わない。要するに世界は人間の意図によって物がつくられているように造物主によって創られている。理神論的説明である。

さてフィロはヒュームにいつそうふさわしい。フィロはいかなるものも原因なしにはありえないということは認めるが、このことを経験を超えた領域にそのまますぐあてはめようとはしない。なぜなら「完全などというものはすべて相関的 relative なものなのだから私達は神的なもの Divine Being を理解したとか神の能力は人間の能力に似ているなどということを結論すべきではない」また「私達が人間や動物に見いだすような思考とか計画は、暖と寒や、引と反発、そのほかたくさん日々の観察に見うけられる事がらと同じく宇宙の起源や原因の一つにしかすぎないものだ。一略一部分を全体に移すことで何らかの正当な結論がえられるのであろうか。一略一毛髪の成長を観察することから人間の発生に関することを学ぶことができるであろうか。風にゆられる木の葉の状態から私達は樹木の発育に関する知識をうることができるだろうか」<sup>(11)</sup>。フィロの所説はむしろわれわれの知識の限界をまず明確に規定しようとする。「クレアンサスの自然の経験から神性をひきだす analogy はなんの保証もない脆さをたちまち暴露する。なぜなら私たちは石が落下したり、火が燃えたりすることをなんども経験するにしても、もしなにか新しい事例が示されたとき、なんのためらいもなく今までの慣れた習慣を取りのぞいてしまうからだ。神性の観念は現存の事象から導きだすことができず、それは単なる可能性であり仮説にすぎない。」結局、フィロにとっては経験のみが現象の真の原因を人間に指摘するとされる。要するに神性への積極的説明はあたらず、宗教の非論理的飛躍的性格がフィロによって論述されるのである。

以上の3人のなかでフィロの所説こそヒュームとみるべきであろう。ヒュームはトリーティズのなかで虚構的信念を注意深く分析した。「われわれが幼時から持ちなれている事がらに関する所信や概念は非常に深く根を張っていて、悟性あるいは経験のすべての威力をもってしてもこれを根絶しえないほどである<sup>(12)</sup>。」この虚構的信念は非常に深く、また強い力を持っていて真正の事実につ

いての知識のなかに生氣をもって混在しているという。この不確かな確かさを除くことがヒュームの知識論での主題であったが、宗教論でも同じであることはいうまでもない。神を宇宙論的に証明するにせよ、類似の原理をあてはめて推論するにせよそこにはなんらかの飛躍がある。これはヒュームには許されないことである。だからヒュームは“Dislogues”のなかで宗教への考察を論理から感情面に移していくことになる。そしてそこではじめて積極的な説明がなしえたということができよう。たとえば1)神の属性を叡知とか思惟とか計画などするのはこれらの言葉が人間にとって名誉あるもの *honourable* であるからとか、2)宗教の正しい感覚に導かれるには幸せより不幸や害悪による場合が多い。なぜなら不幸や苦痛は永続しがちでそのとき勇氣はおとろえ、ゆううつが私達を捕えてしまう。「人生に満足もせず、死を恐れる。これが私達を捕えている秘密の鎖なのだ。私達の不変の存在にワイロも使えずに恐れているのみ。<sup>(13)</sup>」この不幸や不安感が宗教と結合していることにヒュームは注意したのである。

要約すれば、ヒュームは宗教を論理的には仮説に還元し、1)その仮説は宇宙の可視的現象を説明する特定の法則にすぎぬと断定し、さらに、神性にまつわる一切のものは少くも理性のうちになんの根拠もないとしたのであった。2)したがって宗教はむしろ感情の領域で検討されねばならないこと、すなわち、それは想像の翼にのっているというのである。ここで宗教は想像 *imagination* の分析に焦点をあわせて論じられねばならないことになる。

#### (4)

ヒュームの「インクワイアリー」では私達の知識は知覚→印象と観念→因果性と観念聯合→習慣化と信念の成立という経路をたどって分析された。と同時に社会規範をささえる道徳や正義は人間相互間の感情によって生じることが説かれる。たとえばトリーティズで共感 *sympathy* をつぎのように具体的に考える。「二つの絃を等しく張ると一つの絃の運動は残りの絃に伝達されていくが、それと同じくすべての情念はある人間から他の人間へと即座に推移し、すべての人間に対応的な運動を生みだす<sup>(14)</sup>。」ここで説かれる感情の対応的推移こそ想像にはほかならないわけであり、これこそ理性のうちになんの基礎をも発見しえないものである。したがってヒュームの知識論と感情論を結びつけそれをささえる「想像」こそヒュームを考えるさいの重要な鍵であり、同時にそれは宗教論でもその基底に流れる大事な構成要因 *component* でもある。

まずヒュームの知識論にたちかえてみよう。まず原生的な「知覚」は印象と観念に分けられたが両者の差異は「力と生気の度合い」であった。印象こそ強いもの、弱められた印象が観念である。いいかえれば印象と観念には類似性がみられるというのがヒュームの出発点である。すなわち「私が目を閉じ部室を考えると、私のつくる種々の観念はまさに私が感じとった印象の正確な再現である。いかに細かな点においても一方にあって他に見出されないものはない<sup>(15)</sup>。」という。この印象は「感覚の印象」*impression of sense* と「反省の印象」*impression of reflection* に分けられる。前者は未知の原因から精神に直接原生的に起こり、後者の反省の印象は心に残った観念によって二次的に発生するとされる。たとえばまず直接、感覚印象としての寒さや熱や快苦が知覚され、この印象は心に模写され、心に残存するという意味でそれは快苦等の観念となり、この観念が内的に反省印象を生み出していくというのである。もともとヒュームでは直接発生的な感覚印象とその観念に重点がおかれ、内的機能としての反省の印象と観念は二次的な役割しか与えられていない。これはロックよりの伝統的な経験論の徹底をはかるうえにやむをえないことである。しかしもう少しヒュームの所説をみてみよう。ヒュームによれば「想像」は原印象と同じ順序や形式に拘束

されないものであり、「記憶」はそれらの模様がこれを行なう能力を少しも持たないものとされる。いいかえれば全く固定的な他律的な機能しかみだされないのが記憶または記憶観念である。この記憶観念を適正に統合していくのが例の三つの原理（類似、時間的場所的接近、原因結果）である。ヒュームはあくまで外的な経験的事象に従うことを第一義としこれは心理的実証的経験論から当然のことである。しかし心の実際のはたらきとして「想像」による観念相互の自由な結合も事実上存在することをヒュームは無視しえなかった。<sup>(16)</sup> 事実、ヒュームが分析した心の働きにおいて、「想像」機能は不思議な影をうつしだす。観念を自由にくみかえるという点でははなはだ迷惑なものではあるが、想像機能のはたらかない世界に「同情」や「共感」は成立しえない。一方、宗数においても想像力を伴わない宗教はありえない。<sup>(17)</sup>

ヒュームにおける「想像」を要約してみよう。

1) 記憶をはじめの活気を多分にそのまま保持せるものとし、想像を活気のまったくうすれたものとする。<sup>(18)</sup>

2) 想像が活気の弱いものというのであれば記憶と想像の差異は本質的にみだされないことになる。<sup>(19)</sup>

3) 理知と想像を対立させたとき、論証的必然的關係をもった絶対的知識を生みだす理知の領域は事実として発見できない。結局、一つの事象と他の事象との結合は想像において接合するあるもの、ある原理であるという。この意味では因果的推論も想像による観念の接合ということになる。<sup>(20)</sup>

4) 前項の 1) と 2) は内容上、想像観念であり、3) の場合はむしろ想像力である。だからヒュームは二様の意味で想像を考えている。

5) さらに想像機能はつぎの問に答える。「事物の連続的な存在についての所信や別個な存在についての所信を産むものは感官 *sensé* か理知 *reason* か想像か。」感官は事物の別個の存在についての存在の信念を産むことはあっても連続的存在への所信は産まない。理知も対象の独立的連続的存在の所信を与えはしない。それゆえ対象の連続という信念を与えるものは事実上想像に他ならないと規定される。<sup>(21)</sup>

6) さらに想像機能がネガティブに働いた場合、それが自由に観念を置き換える点が強調される。単純観念をすべて好むままの形態に自由に接合してしまう。だから経験的因果的な事物の恒常的連鎖性を排除してしまった場合の想像機能はたとえいかに活気に満ちた強度をもったものでもそれはもはや虚構でしかない。<sup>(22)</sup>

以上のように想像は積極的な構成的機能を持ちながら他面では恣意的な要素を持つとヒュームは考えたのである。もともとヒュームは「実験的論考を精神の主題に導入する企て」として自分の哲学を論究したのである。だからそれは立場として経験的心理主義であり方法としては実証的でなくてはならない。ヒュームの宗教論は前述のように論理的考察からはなんら積極的意義をみだせず「不安」や「honourable」なものを求める人間の感情面によって考察さるべきであるとされた。ここでは宗教的仮説は悟性というよりは感情によって分析さるべきであるとしたのであった。ここで「感情の翼」としての想像が主題としてとりあげねばならないことは上記のごとくである。ただ問題はヒュームの想像をいかに位置づけるかである。ヒュームは1)におけるように記憶と想像を原理上明確に区別するものを観念それ自体のもっている生氣 *vividness* とした。が、両者には強弱以上の本質的差異は事実上みだされないことになってしまう。このことは実証主義としての立場から許されることではない。<sup>(23)</sup> さらにつぎのようなことはいえないか。すなわち反省印象なるものは、

さらにあらたな観念をうみだすとされているが、このような内感の作用は想像となんらかの相関関係をもっているはずである。ヒュームはこの点を不明確にしてもっぱら現象としての *vividness* を強調していくわけで、これは信念の確立には止むをえないかもしれない。しかし、ヒュームの意図したヒューマンネイチャーの確立のために逆に情緒や想像が知識の底流に流れていることを再検討すべきであろう。宗教が空想的観念の自由結合によって産み出されたものであるかぎり、それは非論理的であり、論証不可能なものであることをヒュームは明らかにしたのである。彼は神性および宗教的態度を否定も肯定もしないのである。ただ「宗教の問題に関する種々の論議に終止符を打たん」としたにすぎない。このことはいちおう成功したわけである。われわれの現象的微視的世界の表象を巨視的概念にあてはめることの非論理性を明らかにしたのである。当時、*serious matter* としての「神の存在や創造計画」はヒュームにとってはあくまでも論理的に不可解であってヒュームは無宗教的懐疑論の立場に立っているといえよう。無論、当時の風潮に逆らうこのようなラディカルな内容は宗教論の出版をおくらせたわけであり、ヒュームは出版に一抹の不安をもっていたのであろう。事実、ヒュームに手稿のなかで “Dialogues” が私の死後2年以内に出版されるように望んでいる。<sup>(24)</sup> ヒュームは無神論的懐疑主義者とみられることに相当気をつかっていたようでもある。“Dialogues” のなかでフィロは最も急進的な懐疑家であるがついには他の二人に論破されてしまうと、あるいは少くも沈黙してしまうとヒューム自身のべている。<sup>(25)</sup> ヒュームがいうようにフィロは論争の過程のなかで多くの問題提起をおこなったことでヒュームの意図は充分達せられたのである。フィロは自分の立場が決して信仰あつ一般の人々と対立するようなものでなく、自分は本性としてはだれも知りえないほど深い宗教心を持ち、神的なものに対して深い崇高な敬虔さを持っているのだと自告してはいる。<sup>(26)</sup> しかし、そのようなフィロこそヒュームだとしてみるのが一番妥当な解釈であろう。

ともかく “Dialogues” のなかで神性という巨視的概念が微視的な現実界からいかにしても合法的に発生しえず、宗教の核心は不可解であることが明らかにされたわけである。同時にそれは感情における宗教の考察を必然的に提起した。事実、ヒュームは「感情は知性に優先し、知性は感情の奴隷である」と述べているように、感情論への推移が図られねばならない。そういったなかで私はヒュームの知識論にも宗教論のなかにもその底流の脈絡をかたちづくるものは「想像または想像力」であろうと確信する。この想像力はヒュームの実証的経験論の意図より生まれでた孤児である（なぜならヒュームは知識論のなかでは想像力に正当な積極的機能を与えていないという意味で）。ともかくここではヒュームと想像の問題は知識論でも宗教論でも主題の核心にふれる重要な契機となっていることを指摘することで止めよう。そしてヒュームは宗教論の考察において「神性という形而上学の世界を実証科学の次元にまでひきおろした」ということができよう。

(注)

(1) “History of England” by D. Hume. Harper and Brothers 版 Vol VI P. 571

(2) “Treatise” by Hume. ed Seby-Bigge P. XIX

(3) “Dialogues” by Hume. Hafner 版 P. 5

(4) “Adventures of Ideas” by Whitehead. Mentor P. 173

(5) “Dialogues” P. 4

(6) “D. Hume” by Laing P. 179

(7) “Dialogues” P. 6

(8) “ ” P. 12

- (9)       ,,       P. 15・16
- (10)       ,,       P. 16
- (11)       ,,       P. 21
- (12)   “Treatise” P. 116
- (13)   “Dialogues” P. 65
- (14)   “Treatise” P. 575~576
- (15)       ,,       P. 3
- (16)       ,,       P. 8
- (17)   “Inquiry” P. 141
- (18)       ,,       P. 8~9
- (19)       ,,       P. 85
- (20)       ,,       P. 92~93
- (21)       ,,       P. 188・193~194
- (22)       ,,       P. 10
- (23)   “Hume's intentions” by Passmore. P. 93~96
- (24)   “Letters of D. Hume” by Greig Vol II P. 453
- (25)       ,,       P. 323
- (26)   “Dialogues” P. 82